

【ポスター発表】

人間福祉の有用性と哲学的考察に関する研究

○ 全州ビジョン大学 玉弼勲

[キーワード] 人間福祉, 有用性, 哲学的考察

1. 研究目的

現代の社会福祉制度は、主にサービス対象者のニーズや権利に焦点を当てて政策が設計されてきた。しかし、福祉の実践が制度中心あるいは一方的な施しに傾く中で、人間の尊厳や主体性、相互関係性といった本質的な要素が軽視されている。そこで本研究は、人間中心の福祉思想を哲学的に再考し、社会福祉の理念的基盤を補完できる「人間福祉(Human Welfare)」の概念を探求することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究は哲学的・思想的観点に基づく文献分析研究である。Eric A. Posner の「Human Welfare, Not Human Rights」(2008)を中心に、福祉概念の転換を考察し、Martha Nussbaum の「能力アプローチ (Capabilities Approach)」、Eva Kittay の「関係的ケア倫理」、池田健正の「社会共同体基盤の福祉論」などを比較検討した。これにより、人間福祉の哲学的正当性を多角的に分析した。

3. 倫理的配慮

本研究は人間対象の実験を含まない文献に基づく理論研究であり、提示されたすべての文献と学者の主張については引用基準に従い適切に出典を明示した。特に国内外の主要な理論家による概念は、学術的に再解釈しつつ、その意味を歪めることなく正確に伝えることを原則とした。また、本報告に関連して開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

人間福祉は、単なる福祉の受益者への配慮を超え、「人間が人間らしく存在するための条件」に注目する。福祉とは権利以前に存在論的な必要性であり、生存と尊厳を超えて、共同体の相互関係の中で実現されるべきものである。Posner は人権論の限界を指摘し、人間福祉を国際倫理の基準とすべきだと主張する。Nussbaum は、人間の尊厳と社会参加を保障する「能力」が普遍的な福祉の基準になるべきだと述べ、Kittay は、人間のケア関係

において発生する相互責任と「関係的尊厳」が福祉の出発点であると主張する。池田健正は、個人と社会、自然が「相互承認」によって福祉を構成すべきだと説く。これらの哲学的議論は、「人間福祉」が政策や制度のみで成立するものではなく、社会構成員同士の承認と責任、そして倫理的な相互作用を通じてのみ具現化されることを示唆している。

5. 考 察

従来の社会福祉概念が制度中心・機能中心的であったのに対し、人間福祉は「存在中心の福祉」への転換を要求する。人間は単なる受益者ではなく、自己決定と他者承認が可能な存在として捉えられるべきである。人間福祉はこのような観点から、人間の本質と共同体の本来の目的を回復する福祉思想である。今後の社会福祉政策は、行政の効率性だけでなく、人間の関係性・生態性・倫理性を反映した「哲学的基盤に基づく統合的福祉モデル」として発展する必要がある。そして、人間福祉の議論はそのような転換の思想的土台となり得る。